



五升菴文草卷三



蝶夢和尙文集卷第三目錄

湖白菴記

水樹菴記

五科菴再興記

梧之の秋入記

國分山幻住菴為趾了石と建一記

恒牛菴記

芭蕉堂供養願文 梧之一色塚供養祭文

鴨壺塚供養願文

白根塚序文

梧中亭記

五科菴記

法可亭記

庖丁式拜見了記

鳴塚願文

山里塚供養文

夕暮塚竹妻久
故郷塚百回忌法樂文
皇塚百回忌法樂文
石山寺奉焼預文

湖白菴記

諸九尾需

昔は院人へ行つた所を改塚は草う里とせしめて却て是は
うけのたうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
一とらを備へてはもて用うたやうにやうの百好の
草うり尾法成の牛の編戸にやあつてそのはら
は流の尾は家へやうかききききききききききききききき
ふのたうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
きききききききききききききききききききききききき
おあつてはうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり

壺中より乾坤の形をあらわすまはやく百味とて
ちりけぬ石炭焚火の美をいふもいふもいふも
ちりや人回す秋の庭ともいふも

人のきぬぬ海はあつた冬さう

水樹菴記

筑前福岡梅珠別業

池邊別業は行人も一回の梅珠をへう隠居あつたや
その庭を水樹と名づけていふれいさういさう
いづく菴の町をいふもいふもいふも
市に隠す大徳といふもいふもいふも

草木は裁まも別端より白のけし梅うふ
色よりよに武陵入りし里よ分入り思ひあつた
根よ葺きうすれ七種とあつた菊う百色
咲く海草の形よいふもいふもいふも
池邊とあつた冬をいふも鴨のうもいふも
いふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふも

月と右花と云ふのは水樹菴

五律菴記

むし〜の入る心さ〜やをりて西行を〜時〜
いひ蓮亂の日時〜の言文よ〜
すひち〜
貞徳の家名〜
すの松あ〜
先徳のよあれい〜
草入菴と人〜
あ〜
せ〜

あ〜
〜
先〜
伊賀の相〜

五律

〜
あ〜
あ〜
あ〜
あ〜
あ〜
あ〜

祝ふむし

海もや祝ふ水もけしむ

五科 唐再興の記

人同り交食ほのそれ欲わう嗜飲ふんはつてれも
わしー衣食いしありほふさむしーわはきあふ
天子の慈徽後継の事ーうたをヤも愚あり之公九卿
殿園とて松皮ゆふの三つ葉四つ葉の優ありお守入城
墨も珠門石垣はこ上りしわさくさく人ささあーまふ
國の守那のぬしに被わう悔わうあなわうあふ

古柳のむし主事の瑞の雛のひりくーたよ祝の心
神ろ詠ふれなふあそて後も西東の心と花を柳の葉
深まに瓦ゆきーまの日の見えて障の舞藏と告ふし
佛のまゝの精舎とていつれう上求菩提の位を修ふ
きれ世業のむし牛のあさむら百姓の家といひ
急よ早業のむしも畜人の店さくー柳子ゆふ
手のゆけりーの宅門は皮何しーの禪ふ
村柳のう三味線むかまけふお女所さーまて
きふの神柳さうなふあしあー物松のあふ
天狗のやうい雲のようふい鬼のそみう海のほたる

鯨洲の陰くちをしらむ草薙も狐萩の枝入
孫不もまようれ日よ又ぬ鬼神や狐も一れ
鳥獸もそみまほふもあま〜かま〜ら〜と〜り〜き
ふ〜一〜家よ一又の栖ありきふもあ〜い農家もあ〜い
草あゆむるをねよ牛の垣中のま〜一〜家〜麻は〜一〜草
群あ〜紙屋の詩もや牛糞芽舎詩人屈とけり
やあ〜手あまをまの房〜あ〜いや〜き〜名あ〜い〜草
さ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
さ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

祢王園友よ真頂山あつ〜山あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ト〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
草の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

今もあも焼野、維子も成よきと
と朝庭と山あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

か〜時〜り〜おの垣も 教もま〜り〜し〜い〜ん〜ま
り〜ら〜り〜き

又〜い〜がらま〜く〜はる〜き〜い〜し〜も〜あ〜

三果無あ候如定入女の候行〜り〜き〜の〜ま〜じよ〜や今
よりの候もま〜も〜し〜り〜かをほ草のき〜よひあ〜ら〜く
あ〜思の〜た〜ら〜れ〜ま〜す〜た〜ま〜も〜あ〜れ〜い〜早苗〜家〜考の
番ち〜い〜せの〜え〜も〜常〜飛〜よ〜定〜り〜く〜た〜も〜思〜ひ〜は〜た〜ま
は菴あ〜り〜く〜あ〜い〜物下石〜た〜夜を〜留〜し〜し〜也
ぬよ〜し〜れ〜あ〜よ〜い〜れ〜ま〜ま〜を〜思〜ひ〜く〜く〜三伏の〜日〜も
う〜し〜く〜か〜れ〜下〜様下根のあ〜れ〜き〜ゆ〜く〜ま〜あ〜め

こ〜い〜の〜候〜あ〜い〜ら〜ま〜ひ〜て〜念〜佛〜や〜あ〜よ〜い〜あ〜く〜を
あ〜ま〜い〜ぶ〜内〜情〜も〜あ〜か〜て〜九月又日あ〜ら〜き〜し〜入〜は〜尾
佛の法見うき〜に〜あ〜く〜

い〜の〜き〜に〜あ〜や〜あ〜く〜の〜ま〜う〜ま〜

干菜盆金にありぬま〜

あ〜れ〜せ〜や〜魂〜ま〜ら〜り〜下〜柳〜も〜あ〜

け〜い〜く〜て〜い〜い〜を〜お〜ま〜預〜や〜あ〜い〜き〜し〜て〜も〜白〜
鳥の籠う屋ま〜き〜ま〜を〜様〜よ〜ら〜り〜の〜け〜く〜小〜砂〜を〜岸〜
あ〜ら〜の〜ま〜あ〜れ〜枝のま〜入〜枝も〜し〜ら〜く〜岨〜疏〜の
は〜は〜く〜れ〜い〜雪のあ〜の〜あ〜〜に〜ほ〜く〜強〜ち〜ぬ

海橋より松をゆきしりえまじぬ鳴くまて目の下
わらわ画のやまをわらわぬあまに雲霞
まはる月の西の西まはるくしりりつるまの月の像
うけまはれぬ情の人れまはるま今まを命綱とてし西の
ゆれま地ありしりりり

名目や飛上れ魚の金まを帯

橋より月よおのころ年をゆまやゆれまのあま
ゆらまの海橋の浪来よ俗まをまの金まを
あまをゆれの人をむしりまをまの海まを
まの海の浦まの千賀行来のあまやゆれまの十三

夜の月のまおる夜あまをまのまをまのまを
あまのまをまのまをまのまをまのまを
りりり浦まのまをまのまをまのまを
ゆまのまをまのまをまのまを

名目や飛上れ魚の金まを帯

國の山幻住居齋跡よ石成建一記

いあ一祀居の住居の幻住庵の石山の真山
中宮山あり國の村まのまのまの二所あり
ゆまのまをまのまをまのまを三曲二百歩のま

その菴の地をせよしししつゝいふことしつ後の
 好すし墮候の思ひつゝしつ明和九年辰午月十二日
 祀候は後々十九年あつしつ日幻何及陸佛
 建

恒平菴記 湖東をぬ川

乙酉秋八月十日秋武政の時つゝつに菴の地を
 高小よたり畔を橋をたよ建て方よつゝ又菴を
 ひよひ丈名のゆめつゝいふことしつよの位きめつゝ
 解く半日の雨を愉しつゝいふ事氷里社二人のすか
 ゑのあつしつをせよしつつゝいふことしつつゝいふことしつ

より毛羽つてつゝいふことしつつゝいふことしつ
 はつゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ
 つゝいふことしつつゝいふことしつつゝいふことしつ

庵丁式おえう記

優りて教の賜けりて枝末とてのれ貴しきを
あはれまゝあはれあはれとていへりてきんくの愛
いへりていへりていへりていへりていへりて
舞ひまゝよおのりの斃るゆふまゝまゝいへりて
いへりていへりていへりていへりて

紅梅のつぼれうめや兒なり

芭蕉堂供養願文 施主名録集序

伏しおのり祖師きき蕉翁にせむとていへりて
このつぼれうめや粟津入浦きの内景よとていへりて

庵とていへりていへりていへりていへりていへりて
思へりていへりていへりていへりていへりていへりて
あはれりていへりていへりていへりていへりていへりて
いへりていへりていへりていへりていへりていへりて
七年の冬十月十二日遷化のうたへりていへりていへりて
やうりていへりていへりていへりていへりていへりて
杖尾翁とていへりていへりていへりていへりていへりて
近きれりて石碑の文字りていへりていへりていへりて
年一りていへりていへりていへりていへりていへりて
草津の秋りて馬追りていへりていへりていへりていへりて

六人の画像とてその様々の人又出づるに其の祭を
禮する者も一應の如くぬれいまたあつてに其角光電
たよりの去来文州のちよ侍聖しておのせれ侍と
し〜はれい今日を日花も聖し〜月も満ち〜いれよ〜
祈り日あれ〜て礼を成の礼を〜侍り〜侍り
大佛廟の礼をよき部のは真経い〜侍り〜侍り
今よ〜礼の連を一千白と興り〜か〜法國の礼よ
捧も〜熊母の交り礼あよ角されい忽ちよ〜
花と文をよのよよ侍り〜地よ嬰〜これ母の音楽と
業の〜よ〜侍り〜よ〜侍り〜よ〜侍り〜よ〜侍り

おそ侍禮文字の業や〜も〜もぬ〜鳥の所を禮佛
手よの因縁〜あ〜よ〜よ〜よ〜よ〜よ〜よ〜よ〜よ〜
て御受〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
りや〜沙門幻阿弥院佛教白明和七庚寅年三月十五日

橋立一巻塚侍養祭文 丹後東陌需

お〜〜夏のは〜あまの物に芭蕉翁の碑造り
おのり〜おのり〜おのり〜おのり〜おのり〜おのり〜
御徳とさ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
あ〜その塚の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

西うを古来の住き。入道跡と彫しむるの碑は親
或わししとてまゝ予故因取師とて居られきれ
思ひはらうこれ等よりの種あるていと粟津の義仲よ
語る古廟又一杯の出城しひうけしりく昔よ可き事
け國よ下向一口下して今日今日碑もよ法塔を
まじけ急坂らしし香の焚く純浩入連歌一坐の
修り一猪乳しりし海に潮をくむ硯入て掘と
和のよの文を書き時を明和四丁亥年五月十二日様
謹くも此後心清思ひむし阿耨海勝の癖あり
杉島象厚又湯と苑し一江戸明石杯を浮ぬる

おもこれ天の鶴よの家みより六十銀玉とぬる
あま三景と教へき此言れ孫ひるまゝあゝあ
降りそ改まゝ雪の夜りを腰痛もぬる多病の功
いよきしと思ひしまゝ孫ひるししされい
横よ子親のやれ教方の一毒のそ紡織ししてま
あゝあゝあゝの切戸のしりり入内事よよくか
今も此地よれよ人うけ事し新しうかあゝい
白を思ひまゝも此言れ此言れ孫ひるし
生涯けれ入位事あゝ教言よまゝし思ひの孫
ひるやうれ孫習よまゝ孫ひるし思ひの孫

悲れきや百年後の今日よらうしてける成碑画
わらう遺跡入社友四十二人むのく一筆の力成
とらひ終るけ塚とらひ地一築きいし一免く
初書の一巻塚し名付き遠く祀奉るゆ後をま
さりてその地を名うてけ海上禅母の文殊堂
おそれい今成布し馬州地の清きけりけり成
琴のまらる常しけりけりけりけりけりけり
成の岸しけりけりけりけりけりけりけり
成物法もけりけりけりけりけりけりけり
ちり成所けりけりけりけりけりけりけり

碑あり香忌洒掃の如き意けりけりけりけり
成の一まら向ふけりけりけりけりけりけり
成の内外の海もけりけりけりけりけりけり
相の度よけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり
入地けりけりけりけりけりけりけりけり
あまけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

楠壺塚供養願文

播磨山李坊需

維時明和五年子冬十月十八日遺才僧惺夢謹而芭蕉
拙青禅師の碑あり長跪して曰嘗て同之祿のむく御東
通照寺の事由祖翁の捨つるに理て是塚一号一季初
一うう七十余年その代他りよま一年うううて
身う啼きみぬのこころに朽瀉は初うう塚と建てるは
荒蕪の所れうたうといふ時雨塚は築く類の固
くくくく塚はあつていふ一其塚の敷丈凡三百
まう五十二あしくくくく南天の八萬四千の塔を
利益をいふううい徳をいふうう好きをいふうう

けくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
路を歩くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
鴻の長うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あの人うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
さあも海けくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

掃木の宮右近を祀はまの神を耳より傳へて其の神を
日よ供ふの靈化あれし地をりて其の碑を建てし
今日より神靈の恩をあれしとてお念ふべく此の神の千
分を興りてみる神靈は成推の冥加祈り返
るに祖考より成流の酬恩に傳へるしや希くも
我門の儀法を碑の文字にて傳へるも其の自
の涼一た成流にありあしなり教白

嶋塚願文

備中三岡

世々世々もろくも宗神の時雨にしろよ人々よ其事

親をまゝとありて其人のり持平教の終りともその
ほき成水の牛屋よあつてそのかたをその根出にたすはれ
は急流をたすはれよまた流りに成神をわたりてお念ふ
庭よせよとるらるしとて其の口にておや不不忠誠の因
もも今日もいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ
玉菴の先は毎湯入番給あれとありて世の宗園とあり
先着の好士十余輩も親の送詠の山岳入景なよ似よ
刻しれし石よ彫り嶋塚に名をきき進者の神祝と
祭りまゝに神事と建てる日志の道場をその神
々のおのの神もまゝに百年う後よいつて遠くへの

昔のけいそ

はつりる碑にさしつゝ

山里塚代書文 越智古色造主

わう世子涅槃の後ある移く世界に前塔後塔
神塔等以建く佛恩以報す〜たつ〜又今世
色蕉翁入る里塚墓塚奈く保く葉く中〜
り〜に墓より國〜よち〜といふ戸あ〜たつらき
あ〜ぬ内雅のほろ〜あ〜る〜に吉備の
ふの奥田房の庄よちの道又海依の好士あ〜る

山里を美事せ〜とあ〜る古翁の愛ら〜あ
れ山里の善毎〜思ひ〜今又〜き〜え
多れあ〜る〜石よちの成刻て除り存の庵の柳の
木のま〜に〜山里塚〜名よちの〜朝夕西掃とほ
あ〜る神〜山雲の神社〜訪〜道〜あ〜る
帝釈山よち〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
付書入る筆跡〜あ〜る〜禱〜と〜と〜と〜と〜と
石よちの〜梅のう成吟〜と〜と〜と〜と〜と
う成つ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
梅のむあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

氷魂を招くこととてそのついでに
お永八年しきこと三日塔を築き
たつとて

夕暮塚伝書文 武州川越

この佛入威の後より四所に塔と建
し中ありて西生延
得道処跡法婦不淫誓所あり
され其の妻子の法
入の跡を慕ひてたつたに
主の跡ありては
よれ後入世より其道入師
も其人の因にありて
碑と
まれありて縁よありて
今やたつて
麦林亦土いりてきり
き甚るる所なり

受のく國の神内吹付
こと此道なり
ありて中より國の事より
其家入内と吹き其人多
うりたりて麦穂老人も
其一人ありて道なり
とみ思ひて思ひたつた
武光の國日暮入里
りて塔を築き夕暮塚
名付くこととて西生
中より跡は塔ありてあり
て其塚伝書文
なり世より其の事
して始りて其の書よ
りて
たつた
たつた
八十に余れり
今
たつた
塚なり

ついでに可面よりついでに孫のよけりの好士ありて
は昔蕉翁のよけり孫のよけり一様吟うねりよけり
四行よりついでに音のねり孫のよけり孫のよけり
蕉翁の善拙不愛徳院より其の清き入る孫のよけり
門人より其のよけり一様の真のよけり内雅の真徳
むねのよけり遠くねりの行るねり一様のまきと清
にまきより下向一様のまき入る物よりまき今席を
まきよりまきをねりに孫のよけり一様のまき
まきより一様のまきをねりまき一様のまき

笠塚百回忌法楽文

さう——元禄九年御東平田明照寺行職李由し
色蕉翁の門人より歌塞集の序文より一様のまき
内雅の實伴山田より一様のまき一様のまき
まき一様のまきのねり一様のまき一様のまき
一様のまき一様のまき一様のまき一様のまき
画像をとりてついでに面受口決のまき一様のまき
まき一様のまき一様のまき一様のまき一様のまき
一様のまき一様のまき一様のまき一様のまき一様のまき
一様のまき一様のまき一様のまき一様のまき一様のまき

懐紙を三場の前よりとらへ龍懸御使よあしきん
りも寛政五 秋九月ありきり

石山寺奉燈歌文

けしくぢのれうあき思ひけくあよるやくあり親志
家成せくおかけしきよみしりの髪と別
あし吉火うほよ少ぶ夜を建しんかきあき
たけえさあしききりしり雪のうおんたけ
祀きと快り日れかきん仏理あき
るふ節えかんたきあきし家うかきんかき

世しりのぬしちしん行親とては
那の門よあきちあきしちあきしちあきし
あしこれ梅鳩よ物ましりあきしきき
あきあきしちあきし道信中あきしあきし
あきしあきし甲あきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきの平あきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし

この寺の救世文士のついでをよむといふら
先づこれ山びら 々々のうらうら石うわやき
あつたるも清 御うまうれらまう 寺匠為浄土
なきい多能あれい代りの御門うわ幸の詠かき
わくも源為憲の蓮う曙われの望式ア、日の夕
辺のむしー物かきうははーあ今の世れ詩人歌人
山越海士とあめうのうあまーもさう詩うもさあゆま
まふふれいあーいまも有縁の伽藍あうら
町いけらあれいまはーも又 燈明と休去
ーもーその地着ううう九入あううう央う

旋燈切徳経う要偈の着人一炷奉能佛得福過前
無有量燈油磔如大海水其炬猶如須弥山の文とや
うへ前書博士中丞朝長の業はうのく石うあう
乃く様爰幻何法師の名をーむされそ紙社あ
名をうされねーいまああのきうあの白の天明
五年五月廿日けく空清くされ内ーく
うけうー大僧却入の房あきうあーのけう地明
休去う表白の又後を納うとああうに二あう
ーあうーあうーあうーあうーあうーあうーあうー

やい寝衣をうけつゝくゝと出向ふ世々の夜もゆきの
東にけしひもあをて女物さし一原氏の向ふに
あつたる通夜一夏の夜のみ一うたふ世々思ひ
書けり

五月や三 うやまの園よりあけくき世日とく
さひのゆい うちまはりの かなもも 内夜ぬく
石ころいせ 檀よかろひのあひとく 一ツちりあ
いぬちをせ 見奉れとつちくれ 三とくし
かゝやきう 光羽四力よちちかや 大也志のま
いほりまき ちよらう鹿 きつちよて 丁せゝあ

まのちりう りらもつちれ けきか 秀徳のたまは
きつちよき 又まこして みらるのり 秀世界と
かへえき うちまはりの 宝蓋 妙あゝ雲も
あひまき 下城のちりて 後戸檀よ 五色の蓮う
花らきり 夜あふ文の堂のあま 山のちり
琴のあき 谷入まきも 伽陀のあ けりあき
かゝるちり せの物さし まるけり ぼろちり
はれちり きいまあかやちりや けりあき 佛の
いふちり ちよらうの けりあき けりあき
今ちり ちよらうの けりあき けりあき

わがけく 市の義乳を けうほく 意志の眼
又うめく 造りし地蔵の ちりきり 苔むせり
かききり 土はくはく けくあつ 雲たえり
町きしる 細くはく かくも せうり
多きり けくも せうも せうり
けくも かくも せうも せうり
無始より けくも せうも せうり
かききり せうも せうも せうり
もけくも 国中へ せうも せうり
飛とも せうも せうも せうり
きりきり 見地 けくも 合十 拈掌
起随 素心 せうも せうも 又七人
極み せうも せうも せうも 百八
くも せうも せうも せうも 廻向奉る

松蘿亭

長白

